

## 身近なキケンないきもの 両生類編

企画展「キケンないきもの」では、県内に住む身近な危険生物を特集して、解説しています。危険生物は、有毒生物の代表であるハチやヘビに注目が集まりがちですが、その危険性があまり知られていない身近な生物に関してもいくつか展示しています。今回は、企画展で展示解説している両生類を紹介していきたいと思います。

## アカハライモリ



鹿児島では、屋久島以北の水場でみることできるイモリで、背側が黒く、腹部は赤色に黒色の斑紋が特徴です。敵から襲われると皮膚からフグ毒（テトロドトキシン）と似た成分を含む粘液を分泌し、身を守ることが知られています。触る程度で死亡した例はありませんが、毒が目に入ると炎症を起こす可能性があります。

## ニホンアマガエル



低山の田んぼや住宅の庭などみられる小型のカエルです。緑色で鼻先から鼓膜の後ろまで黒い帯状の

模様が入るのが特徴で、その姿からカエルの典型的なモデルとして選ばれることが多いようです。非常に身近なカエルですが、皮膚から分泌される粘液には弱い毒があり、注意が必要です。

## ニホンヒキガエル



鹿児島では種子島、屋久島以北にみられる大型のカエルで、「ガマガエル」とも呼ばれています。体はずんぐりとしていて、四肢は短く、水かきはあまり発達していません。水への依存度が低く、繁殖時期以外は水辺から離れたところで生活しています。

このヒキガエルですが、ニホンアマガエルと同様に粘液に弱い毒を持ちます。さらに、鼓膜の後ろにある“耳腺”と呼ばれる器官からは、「ブフォトキシン」と呼ばれる猛毒を分泌します。この毒は、皮膚に付いた場合は炎症を起こし、誤まって口にしたら場合は、幻覚・嘔吐・下痢・心臓発作などの症状がでたり、最悪の場合は死にいたりします。

ヒキガエルは、体が大きく、動きがゆっくりなため、猛禽類やヘビなどの天敵に食べられる可能性が高いですが、そのようなことにならないための最終手段として「ブフォトキシン」を身につけたと考えられています。

このように両生類は自ら守るため、なんらかの毒を持ちます。触ったあとは必ず手を洗いましょう。